保育者養成における学生の音への感性を育む授業実践
—— 身近な素材を用いた音づくりにおける学生の学び ——

Classroom Activities in ECEC Teacher Training Focusing on Sensibility to a Sound
—— Learning of Students in Making a Sound Using Familiar Materials ——

持　田　葉　子*

要　約

子どもの音楽表現の育ちを援助するためには、保育者が豊かな音への感性を持っていることが求められる。本研究は、保育者養成において学生の音への感性を育むために行った授業実践、具体的には身近な素材を使った「一番いいなあと思う音づくり」を取り上げ、学生が身近な素材と関わり、音を探求し価値づける過程で、どのようなことを感じ、気づき、学んでいるのかを、学生の振り返りレポートの分析から考察した。その結果、活動の中で学生が多様な音に気づいていたこと、そしてその多様な音の中から、自分なりの価値観で音を選び出している姿をとらえることができ、本授業実践が、学生の音への感性を高めるための有用な方法の１つであることが示唆された。

キーワード：音、感性、保育者養成

１．はじめに

保育者に求められる資質の１つとして、豊かな感性があげられる。子どもの豊かな感性と表現力を育むためには、保育者自身の感性が重要となるからである。

子どもは、生活や遊びの中で様々な出来事に出会い、その中で様々なことを感じ、またそれを素朴な形で表現することが多い。保育者が、そうした子どもの心の動きや素朴な表現を受容し共感することによって、子どもの感性と表現力は育まれる。表現は、それを受け止めてくれる受け手の存在によって、表現として成立するからである。それゆえに、保育者にはこうした素朴な子どもの表現に気づき、共感できる感性が求められる。「幼稚園教育要領解説」領域「表現」においても、「教師自身にも、幼稚園生活の様々な場面で幼児が心動かされている出来事を共に感動できる感性が求められる。」[1] と記されている。特に、子どもの音楽表現の援助においては、子どもの素朴な音の表現に気づく豊かな感性が求められる。

1989年（平成元年）に領域「表現」が登場して以降、子どもの音楽表現の見方は、出来上がった音楽作品の再生だけを子どもの音楽表現としてとらえるのではなく、その前段階としての音楽の原初的な要素、すなわち表現媒体としての音そのものと子どもとの関わりを、音楽表現の出発点とする見方に変わってきた。無藤が「乳幼児期に作品としてのよい音楽を与えることは重要ですが、それ以前の経験に注目する必要があります。音や声そのもの、あるいは音楽の要素、音楽の基みたいなものですが、それ自体にどう出会わせていくかということを考える必要があります。」[2] と述べているように、子どもが環境の中にある様々な音素材と出会い、そこで様々なことを感じていることに注目し、そこを音楽表現の出発点にしようという見方である。

子どもたちは、遊びや生活の中で様々な音と出会い心を動かしている。筆者もこれまで、様々なそうした子どもの姿を見てきた。雨の音をじっと聴き入る姿。製作コーナーから紙の箱、缶、ペットボトルを取ってきて床に並べ、友だち数人とそれらをバチで叩き、「どれがいい音かな」と言って比べながら叩く姿。楽器コーナーのハンドドラムを叩いているうちに、「祭りの音」と言いだし、保育室を「まー

* Yoko MOCHIDA　聖和短期大学
1）文部科学省　2018　幼稚園教育要領解説　フレーベル館　p. 237
2）無藤隆　2013　幼児教育のデザイン　保育の生態学　東京大学出版会　p. 69

つりまーつり」と言いながら太鼓を叩いて歩く姿。こうした姿からは、子どもが音をよく聴き、また音の質を感じ取っていることが読み取れる。

言うまでもなく、音楽表現は、音を媒体とした表現である。音楽表現の育ちを支えるに当たっては、子どもが表現媒体としての音を聴き、そしてそこから感じたり考えたりして、それがその子なりの表現へと結びついていくという、その過程を大事にしていく必要がある。その意味において、前述した子どもの姿は、音楽表現としては断片的で、また意図的な表現というよりは、無自覚に表れ出た表出的な表現も多いが、そうした姿に目を留め、受容していく姿勢が保育者には求められる。吉永は、保育者の感性を「素朴な音に対する子どもたちの気づきを的確にとらえ、彼らのなす音の表出行為に耳を澄ますことのできるセンス」[3] としているが、保育者がこうした感性を持っていること、また持っていることの必要性を理解していることが求められるのである。

ではこのような感性を、保育者養成校において、どういった授業実践で育んでいくことができるだろうか。筆者は以下の２つの経験が必要だと考える。

まず１つ目は、学生が身の周りの音をよく聴き、その質感に没頭する経験である。子どもたちの音の気づきを捉える感性を養うには、まず学生自身が身近にある様々な音に気づき、その音を感じることが重要だからである。金子は、現代社会における我々と音との関わりについて、「音や音楽を常に浴びているような日常が、意図するとしないとに関わらず、溢れる音の洪水の中で、聞こえている音に気づく、聞こえてきた音から想像して考えるという、自ら『聴くこと』に向かおうとする姿勢が失われつつあるのではないだろうか」[4] と述べているが、特に、学生たちは、イヤホンをしてスマートフォンに触っていることが多く、身の周りにある音を聴こうとする意識が薄れていると言われる。こうした学生が、音に耳を傾け、環境の中にある音の多様性に気づく経験をすることが求められる。

２つ目は、身近な素材に働きかけて能動的に音を探求し、自分にとって価値ある音をつくる経験である。例えば、前述した子どもと音との関わりの例では、子どもは、紙の箱、缶、ペットボトルなどを叩いて音を比較し、その中で「自分にとっての良い音」を探求していた。この良い音を探す過程で、子どもはよく音を聴き、音を自分なりに価値づけていた。また、ハンドドラムの音から「祭り」をイメージして叩いている子どもは、そのハンドドラムの音色に意味づけをし、自分なりの価値を見出していた。感性について小島は、「外界の刺激を感覚器官を通して、自分にとって価値あるものとして受け止める能力」[5] と定義している。自分で音を探求して意味づける過程では、感性が働いている。すなわち、自ら能動的に音を操作し、自分なりに音を価値づける経験が、音への感性を高めていくと考えられる。こうした、身近な素材に働きかけ、自分なりに音を価値づける経験が、学生の音への感性を高め、また同時に、例に挙げたような、子どもの音の表出行為に共感できる感性を養うことにも繋がると考える。

以上の点を踏まえ、筆者は、学生の音への感性を養うための授業として、２つ目にあげた「身近な素材に働きかけて能動的に音を探求し、自分にとって価値ある音をつくる経験」の実践を試みた。具体的には、本学で筆者が担当する「保育表現技術」の授業において、第１段階として、身近な素材を用いてマラカスを製作し、その過程で「一番いいなあと思う音」の探求を行い、さらに第２段階として、音の探求をするうちに沸き上がってきたイメージをもとに、その音のイメージを持ち寄り、グループで音を用いたお話づくりを行った。[6]

本稿では、特に第１段階で行った、身近な素材を使った「一番いいなあと思う音づくり」の授業実践を取り上げ、学生が身近な素材と関わり、音を探求し価値づける過程で、どのようなことを感じ、気づき、学んでいるのかを、学生の振り返りレポートの分析から考察し、本授業実践の有用性と課題について明らかにする。

２．研究の対象と方法

2-1　対象者と方法

（１）対象者

本学2018年度保育科１年生　秋学期「保育表現技

3）吉永早苗　2016　子どもの音感受の世界　心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探求　萌文書林　p. 32
4）金子弥生　2007　思考する人を育てる音環境　音楽教育実践ジャーナル Vol. 4　No. 2　p. 18　日本音楽教育学会
5）小島律子　2004　現代教育方法事典　日本教育方法学会編　p. 84
6）この活動は、小島らの実践事例《ペットボトルマラカス》小学校１年生を参考にした。
小島律子　関西音楽教育実践学研究会　2013　楽器づくりによる想像力の教育―理論と実践―　黎明書房　pp. 41-47

術」受講者で、当該授業実践時に出席し、振り返りシートを提出した122名。

（2）実施時期

授業15週のうちの2週。（2018年11月）

（3）分析方法

授業実施後に学生が記入した振り返りシートの項目を集計し、また自由記述については、記述内容を文章ごとに区切り、類似した内容を分類し、活動を通した学生の気づきや学びについて考察する。

（4）倫理的配慮

活動の振り返りシートを研究に用いることについて、学生に研究の意図と個人が特定されることはない旨説明をした。また協力は自由意志により決定され、拒否する権利があることを伝えた上で、振り返りシートに協力の可否について意思表示してもらい、同意を得たものを使用する。

2-2　授業実践の詳細

（1）授業概要

研究対象の授業実践は、準備課題1回、授業1回で構成した。1学年を4クラスに分け、1クラス概ね35名で授業を行った。課題、授業実践のねらいと内容を表1に示す。

表1　授業実践の概要

	内容	ねらい
準備課題	1週間の音日記をつける。	身の周りの音に意識を向ける。
授業実践	ペットボトルでマラカスづくりを行う。4種類の中身（小豆、胡麻、米、1cmに切ったストロー）を用意し、1種類ずつ音を試し、音を探索する中で、「一番いいなあと思う音」を見つけて発表し合う。	・音に興味を持つ ・音色を探求する中で、感じたり考えたりする。 ・素材や音の出し方によって音色が異なることに気づく。

（2）授業実践の内容

準備課題：「1週間の音日記をつける」

まず音に意識を向けるために、実践の1週間前に「音日記」をつける課題を出した。各自1日1回、時間や場所は自由に、周りの音に耳を傾ける時間を作り、聞こえてきた音の中から自分の好きな音、気になった音の音源と、その音を擬音語で書き提出させた。

実践①（導入）：「音あてクイズ」

ペットボトルでの音づくりに興味を持てるよう、中身の見えない容器に、1つずつ異なる中身（胡麻、米、小豆、1センチ幅に切ったストローの4種類）を入れて、何が入っているのかを当てるクイズを行った。

実践②：「ペットボトルを用いたマラカスづくり」

空のペットボトル（大きさは自由）を学生に持参させた。中に入れるものは、胡麻、米、小豆、1センチ幅に切ったストローの4種類を筆者が用意した。

マラカスをつくる際には、4種類の素材を教室の4角に置き、1クラスを4グループに分け、1種類ずつ順番に音を試すよう促し、また4種類を混ぜ合わせないでつくるよう伝えた。混ぜてしまうと、似たような音になってしまうこと、またいったん混ぜ合わすと素材を分けて取り出しにくくなり、音の比較がしにくいためである。

実践③：「一番いいなあと思う音づくり」

一通り4種類の音を試した後、「自分が一番いいなあと思う音」を見つけるよう促した。その際も材料を混ぜ合わさないこととし、入れる量や振り方などを様々に試すよう伝えた。

実践④：「一番いいなあと思う音を発表し、お互いに聴き合う」

出来上がった後に、一人ずつ自分のつくった「一番いいなあと思う音」を発表してお互いの音を聴き合った。

振り返り：「振り返りシートへの記入」

発表が終わった後、振り返りシートの記入をした。項目は、以下の通りである。

・最終的に選んだ素材
・その音のどんなところが「いいなあ」と思いましたか
・自分で音をつくったり、他の人の音を聴いたりして気が付いたこと、感じたこと

3．結果と考察

3-1　「一番いいなあと思う音づくり」において学生が選んだ素材

「一番いいなあと思う音づくり」では、学生は4

表 2　学生が選んだ素材の割合

小豆	胡麻	米	ストロー
44人（36.1%）	35人（28.7%）	32人（26.2%）	11人（9.0%）

種類の素材を１つずつ量を変えたり鳴らし方を変えたりして様々な音を試し、最終的に自分自身が「一番いいなあと思う音」を１つ選んで発表した。ここではまず、「一番いいなあと思う音づくり」の際に、学生がどの素材を選んだのかを見ていきたい。

表２に示すように、ペットボトルの中に入れる素材としては、小豆を選んだ学生が一番多く、次に胡麻、米と続き、ストローはかなり少ない結果となった。

3-2　その音のどんなところが「いいなあ」と思ったか

次に自分が選んだ音の、どんなところが「いいなあ」と思ったのかを表３にまとめた。学生個々の音の捉え方を尊重するため、ほぼ同じ表現のものはまとめ、その他はそのまま掲載した。

（１）小豆

小豆は、学生に一番選ばれた素材であった。表３

表 3　その音のどんなところが「いいなあ」と思ったか

小豆	胡麻	米	ストロー
低くて落ち着く音（７人）	優しいサラサラとした音（３人）	優しい音（９人）	優しい音（４人）
重い感じの音（６人）	波のような音（３人）	波の音（３人）	柔らかい音
はっきりとした音（６人）	落ち着く音（３人）	パチパチとはじけるような音	軽やかな音
大きな音（５人）	静かで優しい音（２人）	癒しの音	少し高めでカラカラという音
元気な音	かわいい音（２人）	シャカシャカという音	カラカラと優しい音がする
力強い感じ	サラサラという音（２人）	カサカサとして心地よい	音が柔らかくて優しいところ
豪快な音	サラサラと軽い感じの音	サラサラとした音できれいな音	軽くて可愛らしい音で優しい音もする
しっかりとした音	サラサラと落ち着く音	サラサラとした心地よい落ち着いた音がする	うるさすぎず、静かすぎずちょうどよい
硬い音	サラサラした音で繊細	サラサラと水が流れているような音	
心地良い音	うるさすぎず柔らかい音	細かい音で高い音、かわいらしい	
波のような落ち着く音	音が静かでうるさすぎない	高い音で大きい音が鳴るところ	
波のような落ち着いた音が鳴る	繊細で主張しすぎない音	少しの量でもはっきりとした音	
海のようなきれいな音	小さいけれど「サラー」というきれいな音	小さい音がいろいろきこえてきて心地よい感じがする	
カランカランと鳴る音（５個入れる）	軽い音	細かくパラパラとしている	
カラカラと鳴るところ	音が繊細で細かくきこえる	固まった音ではなく、１粒１粒が独立した音を出している	
カランカランとかわいい音	細かいかわいらしい音		
しっかりと音が出てコロコロしている	サッとした軽やかな音	少し高くて軽やかな音	
ゆっくり振ると小豆が１つずつカラカラコロコロなる音	海で砂が流れているような優しくて落ち着いた音	大きくなりすぎず、小さくなりすぎない音、一粒ずつ細かい音がある	
ゆっくりペットボトルを傾けた時のサーっと落ちる時の音	シャカシャカと音が跳ねて明るい音		
パラパラときれいな音がする	静かにシャラシャラ鳴るところが上品	パラパラとした高い音	
小豆がペットボトルの中でぶつかってシャカシャカ鳴るところ	小さい胡麻同士がすれて、シャカシャカとした音		
深く響くような音	細かい音が重なって柔らかい		

に示す通り、小豆を使ってつくった音のどんなところが良かったのかについては、「大きい音」「重い感じの音」「はっきりとした音」「低くて落ち着く音」などが多く、ある程度の小豆の量が入って、大きく重い感じの音が好まれていることがわかった。しかしその一方で、「カランカランと鳴る音」「カランカランとかわいい音」などの表現に見られるように、小豆を数粒いれた時の音に、良さを感じている学生もいることがわかった。

（2）米

米を素材として選んだ学生では、米の音の優しい音がいいなあと感じる学生が一番多く、次いで波の音のようなところと続いた。「サラサラ」という表現が多いことからもわかる通り、小豆とは異なり全体的に優しさや、繊細さを感じているようであった。

（3）胡麻

胡麻についても、米と同様「サラサラ」という擬音語が多く見られた。しかし、音が静かでうるさくない、軽やか、繊細、細かいという表現に見られるように、米以上に、胡麻の音に細やかな繊細さを感じ取っているように思われた。

（4）ストロー

ストローは、学生に一番選ばれなかった素材である。どんなところがいいなあと思ったのかという問いには、「優しい」が一番多く、「柔らかい」「可愛らしい」などが続いた。確かにストローは、小豆や米と比べて音が小さくはっきりしないため、その点であまり選ばれなかったのだと思われる。しかし、ストローを選んだ学生たちは、その音を「優しい」「柔らかい」「可愛らしい」と捉えていることがわかった。

（5）学生の音の擬音語での表現

その音のどんなところが「いいなあ」と思ったかの回答の中で、擬音語を使って、その音を表現する学生が多かった。表4に、素材別の擬音語表現をまとめた。素材別の擬音語表現を比べると、学生がその音の質をよくとらえていることがわかる。小豆は、素材の中で一番硬く、そのためペットボトルに入れると、他の素材よりもはっきりとした音が出やすい。また反対に、胡麻やお米は、学生の「サラサラ」「シャカシャカ」の表現からもわかる通り、比較的柔らかである。学生は素材による質感の違いをよく感じ取っていることが分かった。

表4　「いいなあ」と思った音の擬音語表現

小豆	胡麻	米	ストロー
カランカラン	サラサラ	サラサラ	カラカラ
カラカラコロコロ	シャカシャカ	パチパチ	
カラカラ	サッと	シャカシャカ	
コロコロ	サラー	カサカサ	
パラパラ	シャラシャラ	パラパラ	
シャカシャカ			
ゴロゴロ			

これらの結果から、学生の素材の選択には差ができていたが、しかし学生一人ひとりは、4つの素材の中から、自分なりの感じ方、価値観で「いいなあ」と思う音を選び出していることがわかった。

3-3　自由記述から見た学生の学びと気づき

振り返りシート「自分で音をつくったり、他の人の音を聴いたりして気が付いたこと、感じたこと」の自由記述について、記述内容を文章ごとに区切り、類似した内容を分類した。その結果、以下の項目に分類することができた。

・素材や鳴らし方によって音が異なることへの気づき
・素材ごとの音色の印象
・人によって音に好みがあり、個性があることへの気づき

以下で、それぞれの項目について述べる。

（1）「素材や鳴らし方による音の違いへの気づき」

4種類の素材やそれぞれの素材の量、またペットボトルの形状、音の鳴らし方の違いによって、音が異なることに言及した学生の主な記述内容を表5に示した。

活動の最初の段階では、学生は、提示された素材の音を試し、嬉々として音を鳴らしていたが、「一番いいなあと思う音をつくる」課題が始まると、様々な音をじっくり聴く姿勢に変わっていった。

その過程を通して、4種類それぞれで音が異なるということだけではなく、同じ中身でも、入れる量やペットボトルの振り方や持ち方によっても音が異なることに気づいていた。特に、ペットボトルは、凹凸のあるもの、柔らかいものなどその形状は様々で、見た目には同じペットボトルに見えるが、中身を入れて音をよく聴いてみると、その少しの形状の

表 5　素材や鳴らし方による音の違いについての言及

記述例
・同じ素材を使っていても、入れる量や振り方によって全く音が違っていておもしろかった。
・中の素材は４種類だけだが、容器の形、振るスピード、中身の量、振り方が少し違うだけで、それぞれ違う音が鳴ることを感じた。
・鳴らし方も工夫次第でいろいろな音になると気づいた。
・材料の種類や量によって、音色は多様に存在すると気づいた。
・素材の量を変える事で、音の大きさや音の高さが変わることに気づいた。
・振り方を変えてみるとまた違った音が出てきて、音って無限に存在するのだと感じた。
・キャップに当たる音や、ペットボトルの形によって全員の音が違った。
・ペットボトルを傾けたり、振ったりなど様々な音の出し方で色々な音が出て面白いと感じた。
・ペットボトルでも、ペットボトルのふたを上にして持ったり、下にして持ったり、横にして持ったりするのでも音がかわることがおもしろかった。
・ペットボトルがつるつるだと流れるようになって、でこぼこがある物は、ひっかかったりしてまた違って聞こえた。

違いで音が変化することに気づく学生も多くいた。さらに、ペットボトルに小豆を１粒入れ、ペットボトルの蓋部分に小豆が当たると、鈴のような輝いた音がすることに気づく学生もいた。

このように、活動が始まる前は、ペットボトルマラカスの音は想像できると思っていた学生も、実際に様々に試してみると、「音って無限に存在するのだな」という学生の言葉からわかるように、ちょっとした素材や振り方の違いで、音の世界が広がることに気づく学生が多かった。

（２）「素材ごとの音の印象」

４つの素材を自分で試したり、また他の友達の音を聴いたりする中で、その素材ならではの音の特徴を感じ取り、比較している学生もいた。表６にその言及を示す。先にあげた音の擬音語表現でも述べたが、こうした記述をした学生は、音をよく聴き、音の質感をよく感じ取っていることが伺える。

表 6　素材ごとの音の印象

記述例
・ゴマは小豆と違い、繊細な音だと感じた。
・お米と胡麻は、作る前はあまり音の違いはないだろうと思っていたが、作ってみると少し違い、それぞれがとても軽やかで明るい音であった。
・小豆よりも胡麻やお米などの小さいものの方が、繊細な音が鳴っている感じがした。
・小豆の音を聴いた時は、力強い音だなと思っていたが、他の人の音を聴いて、優しい音がしたり、楽しそうな音がしたりして音の違いが様々なのだと気づいた。
・小豆は、ゆっくりペットボトルを傾けると虫の声みたいに聞こえた。
・胡麻は本物のマラカスに近い音がした。

（３）「それぞれに音の好みや個性があることへの気づき」

また自由記述の中では、「一番いいなあと思う音づくり」発表で、一人ひとりの音を聴き合うことによって、一人ひとりの音が違っており、人によって好みは異なることに気が付く学生もいた。表７にそうした学生の記述を示した。こうした気づきは、子どもの音楽表現を援助する際に大変重要な視点である。その意味で、お互いにつくった音を共有し合うことは、大変有益な活動であることがわかった。

表 7　音の好みや個性があることについての言及

記述例
・１つ１つの音の鳴らし方に個性があり、１つとして音が全く同じことはないのだと感じた。
・音の好みは皆バラバラであることや、自分の心に流れこんでくる音や、ぴったりと合うと感じる音があることに驚いた。
・人それぞれ好みの音が違い、聴いていて楽しかった。
・大人でも子どもでも個性が出るから楽しいと感じた。
・似たような音はあっても、同じ音はないところがマラカスづくりのおもしろいところだと思いました。

４．総合考察

これまでの結果からは、学生が活動の中で多様な音に気づいていたこと、そしてその多様な音の中から、音を比較して、自分なりの価値観でいいなあと思う音を選び出している姿をとらえることができた。

はじめにでも述べたように、身近な素材に働きかけ、自分なりに音を価値づける経験が、音への感性を高めていく。今回の実践から、音をよく聴くこ

と、そして音を自分なりに考えて選び出すような働きかけが重要であることがわかった。

こうした働きかけについて兼平は、やみくもに音を出す段階に、活動を設定して音に耳を傾けざるをえない状況を作ることにより、「自分の行為とその結果どのような音が鳴っているのかという、手段と結果との関係を意識するようになる。（略）ここで自分が出した音色に注意が向き、音色を知覚・感受するようになる。」[7] と述べているが、今回の実践においては、「一番いいなあと思う音をつくる」という働きかけが、音に耳を傾けざるをえない状況となっていると考えられ、その意味で、今回の実践が学生の音への感性を高める１つの有用な方法となったと言えるのではないだろうか。

また、「一番いいなあと思う音づくり」の過程では、自由記述にもあるように、学生の多くは、素材の性質の違いだけでなく、中に入れる素材の量やペットボトルの形状によっても音が異なることを発見していた。それは、学生が素材の質を認識していることに繋がる。また、「ペットボトルを傾けたり、振ったりなど様々な音の出し方で色々な音が出て面白いと感じた。」「ペットボトルのふたを上にして持ったり、下にして持ったり、横にして持ったりするのでも音がかわることがおもしろかった。」などの記述に見られるように、学生は、身体を使ってペットボトルを操作し、その操作の仕方によっても音が異なることを認識していた。すなわち、素材と音との関係を、身体を通して認識しているのである。小島は[8]、「楽器づくりは、素材を直接変化させることで素材の物質的な性質を知ると同時に、そこから生み出される音のさまざまな質を身体全体で認識するという活動である」と述べ、さらに「身体全体で、というのはまさに感性が働くことである。」と述べているが、身近な素材と身体を通して関わる経験が少ない学生にとって、今後こうした活動が、さらに必要になると考える。

さらに、振り返りシートにおける学生の自由記述には、「１つ１つの音の鳴らし方に個性があり、１つとして音が全く同じことはない」や「音の好みは皆バラバラであることや、自分の心に流れこんでくる音や、ぴったりと合うと感じる音があることに驚いた。」などのように、人によって音の好みは異なり、またそれぞれ個性があることへの記述が見られた。こうした気づきは、一人ひとりの子どもの感じ方を大切にし、子どもの音の発見や表現に共感できる保育者になるために、大変重要な視点である。今回の実践には、学生の音への感性を高めると同時に、子どもの音の発見や表現に共感できる感性を身に付けるというねらいも含まれていた。その意味において、今後もこうした気づきを促す活動を、さらに行っていく必要がある。

５．今後の課題

本稿では、学生の音への感性を高めることを目的として、学生が身近な素材の音を探索し、そして自分にとって価値ある音を選びだす活動を実践し、学生の振り返りシートの記述を考察した。この結果から、学生が活動の中で多様な音に気づいていたこと、そしてその多様な音の中から、音を比較して、自分なりの価値観で音を選び出している姿をとらえることができ、本稿で述べてきたような身近な素材を用いた音づくりは、音への感性を高める有意義な方法の１つであることを、あらためて認識できた。

このような、身近な素材を用いた音づくり、すなわち手づくり楽器は、保育現場においても、マラカスなどよく見られるが、つくった後は、歌や音楽に合わせて音を鳴らして終わりということが多い。こうしたことも楽しい経験の１つではあるが、それだけではなく、音をよく聴き比べられる環境構成の工夫と、働きかけを吟味することで、より子どもの音への感性を刺激し、子どもと音との出会いを豊かにすることができるのではないだろうか。

そうした意味において、今回のような実践を、学生が保育現場で子どもたちと行っていくために、どのような内容、環境構成、援助が必要になってくるのか、授業の中で、学生自身で考える機会を持つことが必要である。今回の実践ではそこまで行うことができなかった。今後は、保育での指導計画に落とし込むまでを一連の授業として計画し、実践していくことを課題としたい。

7）兼平佳枝　2013 「『構成活動』としての楽器づくりの実践の視点」
　小島律子　関西音楽教育実践学研究会　2013　楽器づくりによる想像力の教育―理論と実践―　黎明書房　p. 32
8）小島律子　関西音楽教育実践学研究会　2013　楽器づくりによる想像力の教育―理論と実践―　黎明書房　p. 17

引用文献

小島律子　関西音楽教育実践学研究会　2013　楽器づくりによる想像力の教育―理論と実践―　黎明書房
金子弥生　2007　思考する人を育てる音環境　音楽教育実践ジャーナル Vol. 4　No. 2　pp. 18-21　日本音楽教育学会
文部科学省　2018　幼稚園教育要領解説　フレーベル館
無藤隆　2013　幼児教育のデザイン　保育の生態学　東京大学出版会
吉永早苗　2016　子どもの音感受の世界　心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探求　萌文書林